過去 現在 未来 をつなぐ埋蔵文化財

No.65

埋文群馬

MAIBUNGUNMA

埋文群馬No. 65　目　次

● 発掘最前線　1
本郷満行原遺跡　－古代の寺院関連遺構と多彩な出土遺物－
長澤典子……2

● 発掘最前線　2
岩鼻 47 － 1 遺跡・岩鼻 47 － 3 遺跡　－かつて存在した古墳群－
麻生敏隆……4

● 最新レポート　I
米山遺跡　－駅家や郡衙を支えた古代の大集落－
飯田陽一……6

● 最新レポート　II
富岡市 T007 遺跡　－古墳の概要と８号墳の出土遺物－
新井　仁……8

● いま、地域が見えてくる　1
中栗須邸前遺跡　－にぎり鋏－
友廣哲也……10

● いま、地域が見えてくる　2
中室田岩城遺跡
－室田地区初の敷石竪穴建物（縄文）、弥生時代前～中期の土器－
高島英之……11

掲示板・表紙の写真解説

公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団
http://www.gunmaibun.org/

発掘最前線1

本郷満行原遺跡（ほんごうまんぎょうはら）　（高崎市本郷町）

ー古代の寺院関連遺構と多彩な出土遺物ー

主任調査研究員　長澤典子

1　はじめに

本郷満行原遺跡は、烏川左岸の標高170mほどの台地上に位置しています(写真1)。遺跡名にある「満行（まんぎょう）」は、中世以降の榛名神社を示しており、この遺跡の北側には、榛名木戸（きど）神社があります。周辺には、６世紀中頃～７世紀代にかけて、65基の古墳が築造された本郷奥原古墳群、昨年度調査で小銅像が出土した本郷鶴楽（かくら）遺跡、銅印が出土した蔵屋敷（くらやしき）遺跡などがあります。西毛広域幹線道路事業に伴って、平成29年度から発掘調査が進められ、これまでに縄文時代の竪穴建物、奈良時代の寺院関連遺構、奈良・平安時代の竪穴建物、平安時代の畠跡、江戸時代の復旧坑などが発見されました。

今回、新たに縄文時代前期の竪穴建物２棟、古墳時代後期の竪穴建物１棟、平安時代の集落と畠跡、中世の土坑墓と道路跡などが発見されました。

ここでは、古代の寺院関連遺構、竪穴建物のカマド補強材として転用された瓦や円筒埴輪、多彩な出土遺物について紹介しましょう。

写真１　中央が本郷満行原遺跡　（南東から）
奥が秋間丘陵　右端の社（やしろ）が榛名木戸神社

2　寺院関連遺構

本遺跡周辺は、以前より古瓦の散布地として知られており、『榛名町誌』では、寺院跡としてまとめられています(「本郷奥原遺跡」)。

寺院関連遺構は、平成29年度の調査において、遺跡中央付近の最も標高の高い地点で建物を３棟検出しました。南側から、１号建物・２号建物・３号建物とし、３棟とも、中世以降に造られた溝により、一部を壊されていました(写真2)。

写真２　寺院関連遺構（南から）

１号建物は、２間×２間もしくは、２間×３間の礎石建物で、東側が壊されており、正確な規模は分かりませんでした。礎石下には、3.6m×3.2m以上の掘込地業があり、土師器・須恵器、石、鉄製品とともに、多量の瓦が出土しました(写真3)。この中に、蓮の文様が確認できる軒丸瓦がありました(写真4)。２号建物は、3.9m×5.8m以上の掘込地業のみ確認しました。３号建物は、北東部が削平されていて、規模は不明ですが、南側および西側に溝があり、瓦が多量に出土しています。なお、瓦のほかに、門または扉の金具と考えられる鉄製品も出土しています。

瓦は調査区全域から出土していますが、軒丸瓦や軒平瓦など装飾の施されている瓦は少なく、ほとんどは装飾のない丸瓦や平瓦でした。

写真３　１号建物（西から）　礎石とその下の掘込地業の様子。
東側は中世以降の溝に壊される。

写真４　軒丸瓦破片（西から）

３　カマド補強材として転用された瓦や円筒埴輪

調査した52棟の平安時代の竪穴建物の中には、瓦をカマド補強材として転用している竪穴建物が複数ありました（写真5、6）。

さらに、円筒埴輪をカマド補強材として転用した竪穴建物も１棟ありました（写真7）。北東側に広がる本郷奥原古墳群のうち、奥原21号墳のみ、円筒埴輪の樹立があったと報告されています。平安時代の人々は、周辺にあった瓦と同じように、近くにあった円筒埴輪をカマド補強材として転用したのでしょう。

写真５　平瓦をカマドの補強材にしている。（西から）

写真６　丸瓦をカマドの補強材にしている。（西から）

写真７　円筒埴輪を補強材にしている。（西から）

４　多彩な出土遺物

(1)瓦塔：遺跡の南西端で発見されました。窯で焼かれた、ミニチュアサイズの組み立て式の塔で、屋蓋と呼ばれる屋根の部分が１点出土しました（写真8）。

(2)石製丸鞆：古代の役人が身に着けた革製のベルトに縫い付けた装飾品です。平安時代の竪穴建物を検出中に発見しました（写真9）。

(3)土馬：土で作られた馬の形をした製品のこと。頭部の破片が、３号建物の詳細調査中に出土しました（写真10）。

(4)銅印：私印と考えられ、印文は「吉」です。大きさは、縦3.2㎝、横3.2㎝、高さ4.1㎝で、重量は、61.5ｇです。鈕は、やや円弧状に刻みが３カ所あって、中央に孔があります（写真11）。

写真８ 瓦塔片出土状況

写真９ 石製丸鞆出土状況

写真 10 土馬出土状況

写真 11 銅印（吉）出土状況

５　おわりに

今後、周辺遺跡の整理作業成果を受け、本遺跡の過年度分の調査資料と照合することにより、榛名山南西部地域の古代の姿が明らかになっていくと考えられます。

岩鼻 47 － 1 遺跡・岩鼻 47 － 3 遺跡（高崎市岩鼻町）

―かつて存在した古墳群―

専門調査役　麻生敏隆

岩鼻47－１遺跡と岩鼻47－３遺跡は、県道前橋長瀞線の片側２車線化拡幅工事に先行する埋蔵文化財の発掘調査によって、その内容が明らかになりました。

これらの遺跡は岩鼻町地内に所在し、烏川支流の井野川右岸に広がる井野川低地帯に立地しています。今回は、群馬県立歴史博物館や群馬県立近代美術館のある群馬の森や、日本火薬(株)工場敷地の西側にある県道の両側を調査しました(写真１)。

調査地点から北側にあたる綿貫町と岩鼻町にかけては「綿貫古墳群」が広がっています。この古墳群は大小数十基(一説に50数基)の古墳から成り、５世紀前半から７世紀にかけて造られたと考えられています。現状では、数基が残っているに過ぎませんが、代表的な古墳として、県内最大級の横穴石室内から銅製水瓶や銅鏡など大陸の影響を強く受けた副葬品が多数出土した綿貫観音山古墳(史跡)、舟形石棺をもつ不動山古墳がよく知られています。造営された時期は綿貫観音山古墳が６世紀後半、不動山古墳が５世紀後半から末頃とされています。

遺跡周辺では、岩鼻47－１遺跡の西側に広がる高崎台地上に天神山古墳が現存しています。また、岩鼻47－３遺跡の調査区周辺には、昭和13年(1938年)に刊行された『上毛古墳綜覧』に記載のある岩鼻村４号墳が、かつてあったと推定されます。

岩鼻47－１遺跡では、古墳時代の竪穴建物２棟、溝５条などが検出されました。１棟の竪穴建物は１辺が約3.5ｍで、炉跡と推定される焼土の集中部を伴うものでした(写真２)。5条の溝は幅1.5ｍ、深さ0.5ｍほどの規模で、いずれも浅間Ｂ

写真１　岩鼻 47 －３遺跡（北から）

軽石を含む土で埋没していました(写真３)。埋没土中からは円筒埴輪の破片が多量に出土しました。

これらの溝はいずれも弧を描くように走行することから、円墳の周堀の一部であると考えられます。しかし、後世の削平を激しく受けており、古墳の盛土の痕跡は認められませんでした。

また、調査区の幅が狭いことから、古墳の規模は明確にはわかりませんでしたが、直径10～15m程度であると推定されます。出土した円筒埴輪は周堀が埋没していく過程で流れ込んだものと考えられます。

写真２　古墳時代の竪穴建物（岩鼻 47 －１遺跡、南西から）

写真３　円墳の周堀（岩鼻 47 －１遺跡、南から）

岩鼻47－３遺跡では、古墳時代の竪穴建物７棟、溝８条などが検出されました。竪穴建物のうちの１棟は古墳時代前期のもので、１辺が約５ｍであり、中央部に炉跡と推定される焼土の集中部が検出されました。別の１棟は古墳時代後期のもので、１辺が約５ｍありました。西壁の南隅寄りにカマドが敷設され、小型の円柱状の石が袖の構築材として利用されていました(写真４)。また、岩鼻47－１遺跡と同様に古墳の周堀と考えられる溝がいくつか検出されました(写真５)。これらの周堀と推定される溝の検出状況から、両遺跡には合わせて７～８基前後の円墳が存在したと推定されます。おそらく「綿貫古墳群」の一群を構成するものと考えられます。

検出された竪穴建物も５世紀から６世紀のものであることから、周辺の古墳の造営とほぼ同時期か、少し前に建てられたと考えられます。

写真４　古墳時代の竪穴建物（岩鼻 47 －３遺跡、東から）

写真５　円墳の周堀（岩鼻 47 －３遺跡、南から）

遺跡周辺にかつてあった古墳群は後世の削平によって、その多くが失われていました。しかし、今回の発掘調査によって、古墳群の広がりや内容を知る手掛かりを得ることができました。発掘調査や整理作業が今後進むことによって、この地域の歴史が解明されていくでしょう。

米山遺跡（安中市 0334 遺跡）　（安中市安中）

―駅家や郡衙を支えた古代の大集落―

嘱託員　飯田 陽一

米山遺跡は、前橋市と富岡市を結ぶ西毛広域幹線道路建設に伴い、平成30年度に発掘調査を行った古代の集落遺跡です。遺跡は安中市役所庁舎の北側約200 ～ 500mに位置し、国道18号との交差点を南端としています。

調査地点は地形から二つに分けられます。北側地点は、九十九川右岸の低台地上にあります。ここは高崎泥流とも呼ばれる約1.5万年前にできたと推定される大規模な氾濫層を基盤とする、標高約160mの地点です。南側地点は、安中・原市台地と呼ばれる碓氷川と九十九川の間にある標高約170mの、東西に長い台地上の地点です。

遺跡北側に広がる秋間丘陵には、古墳時代末から平安時代にかけて、須恵器や瓦を生産した古窯跡群が広がります。この窯跡群の製品は、上野国分寺などに大量に運ばれ、律令制下の古代群馬建設に大きく寄与しました。

次に、発掘調査の成果概略を、北側と南側の調査地点に分けて記します。

写真１　南側上空より眺めた北側調査区
背後に秋間丘陵、その後方に榛名山を望む

北側地点は、古墳時代前期（４世紀）から、平安時代後期（11世紀初頭）まで続く集落遺跡です。188棟の竪穴建物を調査しましたが、平安時代の遺構が主体です。竪穴建物は密集し、重複が顕著でした。また湧水が多く、夏場の調査では水対策に苦慮しました。古代の人々は、どのような湧水対策をとったのか、あるいは湧水の状況が現代とは異なったのか、調査中からの大きな疑問でした。集落の北側には九十九川流路沿いの低地が広がり、今でも水田地帯となっています。調査地点の集落には、古墳時代の初頭からこの水田を耕作するために、人々が住み始めました。それが、奈良時代以降、特に平安時代になると、集落の性格が大きく変わります（写真1）。

平安時代の66号竪穴建物からは、鉄製紡錘車が３点まとまって出土しました。紡錘車以外にも刀子などの鉄製品出土が目立ちました。この建物は糸を紡ぐ工房のような建物であった可能性があります（写真2）。

竪穴建物以外からも、貴重な遺物の出土があります。平安時代後期、10世紀後半頃の土坑から、鉄製の轡が出土しました。この付近が馬の飼育や管理に係わった地と推定されます（写真3）。

写真２　鉄製紡錘車（糸を紡ぐ道具）

写真３　鉄製轡（馬の口に装着し、手綱につなげる）

写真４　左：風字硯　右２点：石製巡方（役人の帯飾り）

その他にも石帯(巡方)や風字硯など、平安時代の役人の持ち物が出土しています(写真4)。また、遠方より運び込まれた土器が多量に出土しています。東海地方で平安時代に盛んに生産された灰釉陶器の他、高級品であった緑釉陶器の出土数が目立ちます。また、分類記号から「壺G」と呼ばれる、平城京・平安京など宮都に多量に運び込まれる細長い壺や、長野県産の特徴的な横筋のある壺など珍しい須恵器の出土があり、この地域が流通の拠点に近接していたことが推測されます。

南側地点は古墳時代後期(7世紀)から平安時代前期(9世紀)にかけての集落で、37棟の竪穴建物を調査しました。ここは台地上で、近年まで建物が立ち並ぶ住環境の良い立地です。近世以降様々な施設が作られ、古代面の残存状態はよくありません。北側地点に比べ、竪穴建物の棟数は少なく、重複もあまり多くありません。集落が営まれた期間も、奈良時代主体で限定的です(写真5)。

写真5　北側上空より眺めた南側調査区
安中市街地を横切るように西毛広幹道が進む

南側地点でも本遺跡の性格を示す特徴的な遺物の出土がありました。奈良時代の役人の帯を飾った銅製の帯金具(蛇尾)が、209号竪穴建物から出土しました(写真7)。この建物は一辺6.5×5.5mの大型建物で、完形に近い約50点の須恵器杯など、膨大な量の土器も出土しました。まるで大宴会を行ったあとのようで、特別な建物と考えられます(写真6)。

218号竪穴建物からは奈良時代の須恵器硯が出土しました。これは大型の円面硯で、脇には透かし窓が刻まれています。寺院や役所で使われる道

写真6　奈良時代大型竪穴建物と出土遺物

写真7　銅製蛇尾
(役人の帯飾り)

写真8　倒置状態で出土した円面硯
(透かし窓の切り込みが並ぶ)

具ですが、その中でも大きさ・豪華さの際立つ、古代の重要な施設で使われるような風格のある遺物です(写真8)。

安中市による発掘調査で、本遺跡の東側約200mにある植松・地尻遺跡から、大規模な掘立柱建物群が見つかり、「評」の刻書土器が出土しました。評とは7世紀の行政区域・行政組織の名称で、701年の大宝律令制定以降、「郡」と呼ばれようになります。郡衙または郡家(郡の役所)の一部と想定される遺跡です。

本遺跡南側には「野尻」の地名が小字名として残っています。都と東北を結んだ東山道駅路の駅家は古代群馬に5か所ありました。その内1つに「野後」の名があり、この駅家が付近にあったと推測されています。

本遺跡は郡衙や駅家などの古代碓氷郡内の中心施設周辺にあり、これらを長期間支えた碓氷郡内にあった7つの「郷」の一つ、野後郷に含まれる集落と推定されます。

●参考文献
安中市埋蔵文化財発掘調査団　2005　『植松・地尻遺跡』

富岡市（とみおかし）T007 遺跡　（富岡市後賀（ごか））

ー古墳の概要と８号墳の出土遺物ー

上席調査研究員　新井　仁

1　遺跡の立地

遺跡は、富岡市後賀の鏑川の左岸にあり、鏑川の支流の星川の河岸段丘上に立地しています。平成７年度に甘楽町教育委員会が対岸の西大山遺跡の発掘調査を実施し、径10m前後の円墳が３基発見され、円筒埴輪･馬具等が出土しています。

今回の発掘調査は、一般県道下高尾小幡線事業に伴うもので、平成29・30年度に行われました。調査の結果、古墳６基、古墳時代前期の方形周溝墓、弥生時代後期や縄文時代中期～後期の竪穴建物･敷石建物等が発見されています。

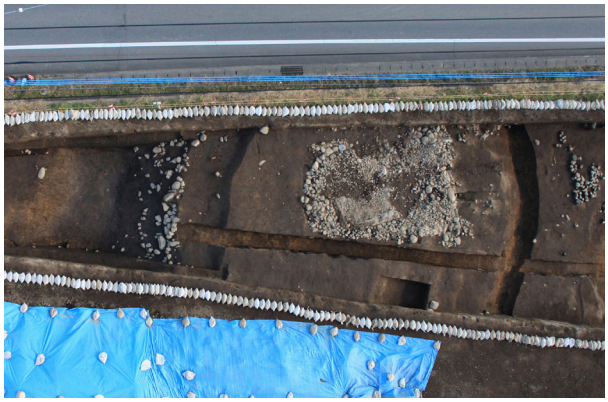
2　発見された古墳

古墳時代中期末～後期にかけての６基の古墳が発見され、東側の調査区では、３号・１号・２号・７号・６号古墳の５基が、西側の調査区では８号古墳１基が確認されました。

１号古墳･８号古墳

１・８号墳は横穴式石室を持つ円墳で、径は約23mと約17～18m、いずれも石室の上部を削平されていますが、遺体が置かれていた玄室は側壁と奥壁の一部が残存し、凝灰岩の大形の切石を使用しています。石室の外側に詰めた裏込めの石も確認されました。８号古墳では、羨道部入口の両

遺跡全景
（写真上が東ですが、東側の調査区と事務所を挟んで西側の調査区があります。西側の調査区は調査が終了し、古墳の位置に番号を入れてあります。３号古墳も調査が終了しており番号だけあります。）



１号古墳全景

２号古墳全景

側の墳丘に葺石を施し、さらにその外側の下半部に土を盛って基壇状にしていることが確認されました。遺物は、１号古墳からは大刀、耳環、鉄鏃等が、８号古墳からは馬具、耳環、小札、刀装具等が出土しています。

２号古墳

径約14 ～ 15mの円墳と推定されます。裏込めの石が一部確認されました。墳丘には葺石が施されていたと考えられますが、大部分は崩落していました。

３号古墳

調査区北端部で周堀が確認され、円墳と考えられますが、大部分は調査区外で詳細は不明です。

５号古墳

径約24mの円墳で、墳丘は削平され周堀のみ残存していました。周堀内から、葺石が崩落したと考えられる礫が多量に出土しています。

７号古墳

１辺約30mに及ぶ方墳で、削平のため、石室は検出されませんでした。全面に葺石が施されていますが、葺石はまず底部に基礎となる石を置き、次に縦に目地の通った石列を設置し、最後に目地の間を石で埋めていったことが確認できました。

３　８号古墳出土遺物

８号古墳石室内からは、装飾品、刀装具、馬具、甲（よろい）の一部など、多くの遺物が出土しています。

８号古墳出土遺物の写真の１・２は、金銅製の耳環（耳飾り）で、被葬者がつけていたものと考えられます。３・４は、刀装具と呼ばれる刀の鞘や柄につけた飾り金具で、銀製と思われます。５は鐙（乗馬の時足をかける金具）、６は鉸具（ベルトのバックル）で、いずれも鉄製の馬具です。７・８は鉄製の小札（小札甲（こざねよろい）と呼ばれる甲を構成する小片）で、金井東裏遺跡の「甲（よろい）を着た古墳人」がつけていたことでも知られています。

４　まとめ

T007遺跡の古墳について、１・８号古墳は、石室に凝灰岩の大形の切石を使用していて、切り出すのにかなりの労力を必要とするもので、また、大刀や馬具、小札などが出土しているため、被葬者は比較的地位の高い人物であったと考えられます。

７号古墳は葺石を伴う方墳ですが、横穴式石室の入口の痕跡はなかったため、埋葬施設は竪穴式石室であったとも考えられ、築造時期が５世紀代に遡る可能性もあります。この古墳も墳丘の１辺が30m近くあり、当該期では大きい古墳であることから、甘楽周辺地域の有力者が埋葬されたものと推定されます。

今後、この遺跡の整理作業を進めることにより、さらに多くのことが分かってくると思われます。

７号古墳全景

８号古墳石室全景

1. 耳環

2. 耳環

3. 刀装具（責金具）

4. 刀装具（鞘尻金具）

5. 馬具（鐙）

6. 馬具（鉸具）

7. 甲（小札）

8. 甲（小札）

８号古墳出土遺物

いま、地域が見えてくる　1

中栗須邸前遺跡（なかくりすやしきまえ）　（藤岡市中栗須）

―にぎり鋏（はさみ）―

専門調査役　友廣哲也

鉄製にぎり鋏の出土

中栗須邸前遺跡は藤岡市中栗須に所在します。平成27年度の発掘調査で２区８号竪穴建物から鉄製の鋏が出土しました。竪穴建物の時期は、出土土器から８世紀末と考えられます。このため奈良･平安時代に使われたものと考えられます。

この鋏は「にぎり鋏」と呼ばれ、刃の中央に支点がなく、手で握りながら切るものです。

このような鋏を日本では「和鋏（わばさみ）」と呼び、現代でも裁縫の時、糸を切るために使われています。

にぎり鋏の出現はエジプトや地中海地方で紀元前1000年ころと考えられ、その用途は羊の毛を刈る道具として発達しました。

日本では鋏の初現ははっきりしませんが、奈良県珠城山古墳（たまきやまこふん）（６世紀中頃）から出土した例があります。まだ一般的ではなく、古墳の貴重な副葬品として出土したものと考えられています。

平安時代以降になると千葉県市原市の市原城（いちはらじょう）遺跡で墓から出土しています。鋏の鉄部分には繊維の跡が残り、布や袋に包まれていたようです。時期は平安時代から鎌倉時代初めと考えられているようです。

一般的に道具として日本に伝わったのはおそらく唐（618 ～ 907）の時代ごろと考えられています。日本での用途は布帛（ふはく）等を裁断したと想像できます。布帛とは織物を指します。

群馬県では前橋市鳥羽遺跡や高崎市神保富士塚遺跡等全部で15本が出土しています。

しかしほとんどの鋏は欠けていて、はっきり形がわかるものはありません。時期もほとんどのものが中近世以降のものです。はっきりと「にぎり鋏」とわかるものは数点しかありません。

中栗須邸前遺跡出土の鋏は16本目となり、完形に近く、「にぎり鋏」とわかるもので、時期も奈良時代のものでした。

鋏が一般的に普及したのは、奈良・平安時代以降で江戸時代になると最盛期になりました。江戸時代になると庶民も和服を着ることが一般的になったことがその理由です。

中栗須邸前遺跡には大型の掘立柱建物が２棟確認され、そのうちの１棟には布掘りという構造の建物があります。もう１棟は柱の穴が円形ではなく長方形に掘りこんでいます。このような建物は一般的ではなく庶民が居住したことは考えにくく、この地域の有力者の居館かお寺のような建物が考えられます。

にぎり鋏　上からの写真　下は横から

また、15号竪穴建物から鉄鉢形の須恵器が出土しています。鉄鉢とは僧侶が托鉢に行くときに持ち歩くものです。この遺跡に僧侶が居た可能性も出てきました。僧侶は国分寺や尼寺が確立する前は地方の有力者に所属していました。中栗須邸前遺跡に住んでいた人のなかに地域の有力者か、あるいは有力者と関係があった人がいたことが理解されます。掘立柱建物の時期も８号竪穴建物と同じ７～８世紀ごろのものです。８号竪穴建物が８世紀末（平安時代）という事から布や花を切る道具として使われた可能性があることは充分に考えることができます。

中室田岩城遺跡（なかむろだいわき）　（高崎市中室田町）

ー室田地区初の敷石竪穴建物（縄文）、弥生時代前～中期の土器ー

専門員　高島英之

1　遺跡の立地と調査経緯

高崎市中室田町に所在する中室田岩城遺跡は、高崎市街地中心部から北西に約15㎞の地点、榛名山南麓の室田台地の間を南流する岩城川東岸の台地上、西側の岩城川に向かう標高約328 ～ 334 mの緩やかな傾斜地に立地しています。

広域農道「榛名南麓フルーツライン」の建設工事に先立って、約3000㎡を平成30年10月から11月まで２カ月間、当事業団が発掘調査しました。その後、令和元年５月から９月までの４カ月間整理作業を行い、11月に発掘調査報告書を刊行しました。

広い範囲に及ぶような調査ではありませんが、約5000年ほど前の縄文時代中期後半～末葉の３棟の敷石竪穴建物が検出されたことや、本県では極めて類例が少なく、紀元前４～５世紀頃の弥生時代前期の土器片がまとまって出土したことなどが注目されます。

2　縄文時代の敷石建物

竪穴建物はいずれも最も標高が高く安定した台地上から検出されました。検出された３棟の竪穴建物はいずれも敷石竪穴建物で、そのうちの１棟が縄文時代中期後半、２棟が縄文時代中期末葉のもので、さらにそのうちの１棟は柄鏡形の敷石竪穴建物でした。いずれの竪穴建物においても建物廃絶時に敷石が抜かれ、炉が徹底的に破壊されているため、敷石はほんのわずかの箇所に、部分的にしか検出されず、遺構の残り具合は良くありませんでした。

本遺跡から南東へ約６～８㎞程度離れた久留馬地区において縄文時代中～後期の敷石竪穴建物が検出されているものの、近辺では全く検出事例が無いため、本遺跡における事例が、高崎市室田地区における縄文時代中期の敷石竪穴建物の初めての発見例です。

3　弥生時代前期の土器

本遺跡からは弥生時代の遺構は全く検出されませんでしたが、計70点の弥生時代前期～中期の土器片が出土しました。

なかでも注目すべき事例である弥生時代前期完形小型壺は、口縁部に縄文帯、頸部無文、胴部全体に斜縄文が施されており、このような文様構成の小型壺の事例は極めて少ないものです。口縁部下には対向する２カ所の穿孔があり、底部には木葉痕が付されています。本県出土の同時期の小型壺としては、安中市注連引原遺跡出土のものがあります。

また、同じく弥生時代前期の深鉢下半部片の内面には煤状付着物がみとめられたため、放射性炭素年代測定を実施したところ、BC.477 ～ 381年という測定結果が得られました。考古学的方法によって得られた年代観と放射性炭素年代測定分析で得られた年代値は矛盾せず、この年代は、関東北西部の前期末～中期初頭の弥生土器の暦年代推定に有効なデータとなり得るものです。

群馬県内では出土事例が非常に少ない弥生時代前期の土器片がこれほどまとまって出土した事例はなく、本県における考古学上の知見として、新たに重要な要素が得られたことになります。

弥生土器出土状況（東から）

4　まとめ

遺跡の所在地は、北東から南西に向かって傾斜する地形であり、竪穴建物は縄文時代中期の３棟がわずかに検出されたに過ぎず、古墳時代後期～平安時代の竪穴建物が１棟も検出されなかったことからも、居住域を展開するにはあまり適さない地形であったと考えられます。狩猟用の陥し穴や耕地の検出も皆無であり、結局のところ、人間の生活・生産域として利用価値が乏しい場所であった時期が長かったのかもしれません。

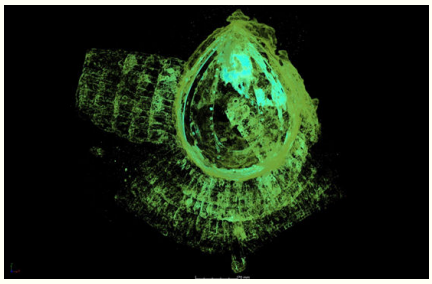
とは言うものの、完形小型壺や深鉢下半部片の重要な事例を含みつつ、弥生時代前期の土器がこれほどまとまって出土した事例はなく、本発掘調査の実施によって、地域の歴史を考察する上で、新たに重要な資料が加えられることになったことの意義は高いものと考えられます。

掲示板

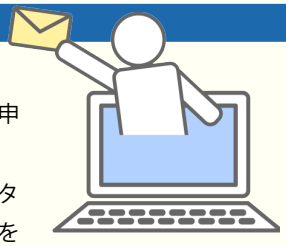
普及課からのお知らせ

1　令和２年度最新情報展 第１期「きらめく武具を身につけて（仮）」予定

■群馬デスティネーションキャンペーンにあわせ、「甲（よろい）を着た古墳人」が身につけていたものや両手で押さえるようにしていた冑（かぶと）などの展示を予定しています。令和２年４月19日（日）からの開催に向けて準備中です。



2　電子メールにより行事案内をお知らせしています。



■当事業団では、年間を通じて展示会や講演会などを催しています。電子メールによるこれらの案内を希望される方は、下記のアドレスより申込みをしてください。

なお、受付時の事務処理上、事業団へ送信していただく電子メールのタイトルは「**行事案内希望**」とし、**郵便番号、住所、氏名、連絡先電話番号**を記入してください。

■電子メール送付先

gunmaifukyu@apricot.ocn.ne.jp

※携帯電話アドレスへの連絡を希望される方は、パソコンからのメールが受信できるように携帯電話の設定をしてください。

■事業団のホームページ

http://www.gunmaibun.org/

連絡先：普及課

☎0279-52-2513

表紙解説

中室田岩城遺跡出土の弥生土器

弥生時代前期～中期初頭の小型壺が出土しました。全体を縄文で飾った伝統的な文様で口には小さな孔が２個あいています。

編集スタッフ／
長澤典子　麻生敏隆　飯田陽一　新井　仁　友廣哲也
高島英之　板垣詩乃　関　晴彦　新井加寿恵

本紙は一般向けの埋蔵文化財情報誌です。
当事業団ホームページ（http://www.gunmaibun.org/）から
PDF をダウンロードしていただけるようになりました。
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
普及課　電話 0279-52-2513 までお願いします。

「埋文群馬」No.65
令和２年３月19日発行
発行　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橘町下箱田 784-2
☎ 0279-52-2513